

要約

アンドレ・ブルトンの生きた「ドキュメント」の特異性

——最晩年における自動記述の再提起を手がかりとして

藤野志織

文学におけるドキュメントという問題は、人文学全体において近年研究の高まりを見せている重要なテーマであり、1910年代から30年代にかけて、ドキュメントを戦略的に取り込み、文学・芸術の領域を押し広げたシュルレアリスム運動の意義は広く認められている。そのなかで、運動の領袖であったアンドレ・ブルトンの代表作『ナジャ』（初版1928年、改訂版1963年）は、改訂版序文において、「「ありのままの」ドキュメント document « pris sur le vif »」という表現が用いられたことにより、この主題を論じるうえで特権的な位置を占める。シュルレアリスムのドキュメントの重要性を明らかにしたミシェル・ミュラの論考（2006）とアリソン・ジェームズの著書（2020）においても、『ナジャ』の重要性が強調されている。いずれの仕事も、ドキュメントを固定された参照点である「資料」と見做し、ブルトン「作品」におけるドキュメントの使用を多角的に論じるものである。

しかし、「「ありのままの」ドキュメント」という表現が用いられた改訂版に大幅に手が加えられている事実を注視するならば、ブルトンの「ドキュメント」とは、一般に了解されている、情報を定着した物体ではなく、変容を許す特異な存在であるという可能性が見えてくる。ドキュメントの使用ではなく、ブルトンの「ドキュメント」が含み持つ意味を解明することは、ブルトンの自伝的な作品に対して、これまでと異なる視座を提供するはずである。同時に、「ドキュメント」が自動記述の実験に胚胎した概念であることを踏まえるならば、この問題は自動記述の再考にもつながっていく。実際に、ブ

ルトンが最晩年に出版した『ラの声』(1961)は、自動記述の問い直しと読むことができる。自動記述はシュルレアリスム運動初期の実践として研究されることが多いが、私たちは、自動記述とともに「思考の記録」として生を受けた「ドキュメント」が、自動記述の支流である「客観的偶然」や「シュルレアリスム遊戯」の実践と理論化と絡み合いながら、1930年代から60年代にかけて、変容することを自ら促す、生きた「思考」そのものとして練り上げられたことを明らかにする。

第1章において私たちが問題にしたのは、19世紀から20世紀にかけて、フランス文学・芸術においてドキュメントをめぐる思索や実践が複数確認できるなかで、ブルトンの「ドキュメント」に注目する意義とは何かという点である。まず『ナジャ』改訂版序文「遅れてきた至急便」の分析を通して、本書の「ドキュメント」が自動記述と関わる点を示すと同時に、本書と自動記述の自己探究という実践的連続性を確認した。続いて、『ナジャ』が反「小説」として構想された点に注目し、この「ドキュメント」の淵源が、反「小説」的野心を抱き、徹底した資料調査に基づき「小説」の一時代を築いたゾラに求められることを示した。しかし、ゾラのドキュメントが自己の外部に探し求められるのに対して、ブルトンの「ドキュメント」は、起こった出来事や事実の次元ではなく、それに対する自己の印象や感情の次元に位置付けられる。したがってこれは、出来事のコピーではなく、ブルトンが書くことによってのみ構成されるオリジナルであると言える。この内面のドキュメントという観点を掘り下げるために、自動記述への反発から深められた、レリスのドキュメント実践である「日記」との比較を行った。これが、ブルトンの生きた「ドキュメント」と影響関係にあったことを示しながら、ブルトンの「ドキュメント」の特徴が更新される点にあることを明らかにした。

第2章では、『ナジャ』が写真と文章によって構成されている点に着目し、記述によって生成される「ドキュメント」について、議論を掘り下げた。はじめに写真のみが『ナジャ』の「ドキュメント」を構成するわけではない点を検証した。続いて、ブルトンによる自動記述の定式が「思考の写真」から「思考の書き取り」に変化している事実に着目し、「ドキュメント」の眼目が、瞬間性から持続性へ移行している可能性を指摘した。『ナジャ』という作品に即して考えるならば、この持続性は、ブルトンの心象風景を映し出すことを可能にする。私たちは、ここに写真と異なる記述の特権を認めると同時に、これを主観的なものを客観的に捉えようとする自動記述の文脈に置き、ブルトンの記述

には写真と同等の客観性があるという結論を導き出した。ブルトンの「ドキュメント」をめぐる関心が、常に出来事を受け取り処理する思考に向けられていたことを想起するならば、ここにもまた自動記述と『ナジャ』の実践的な連続性を見出すことができるはずだ。その一方で、私たちは、『宣言』において、自動記述によって得られるドキュメントが、書き手と無関係なものとして提示されている点を示し、『ナジャ』や『狂気の愛』におけるブルトンと不可分な「ドキュメント」とは異なる点に注意を促した。すなわち、「ドキュメント」の位置付けは、ブルトンのなかで大きく変化しているのである。本書序文の「「ありのままの」ドキュメント」という表現と、本編のあいだに横たわる断絶は、この「ドキュメント」の意味的变化に求められる。

第3章では、前章で示した「ドキュメント」の質的变化の要因を、ドキュメントに対する修正という観点から説明した。『磁場』の「蝕」の草稿に見られる特徴的な三つの加筆と『ナジャ』改訂を「ドキュメント」の更新という連続性のなかに置くことで、両者のあいだの差異が、何に起因するのかという点を論じた。本章で明らかになったのは、1930年以降下火になった自動記述実践が、オートマティズムをめぐる実践として枝葉を伸ばし、客観的偶然や「シュルレアリスム遊戯」のなかで脈々と受け継がれていたという点である。ブルトンの生きた「ドキュメント」は、こうした自動記述の分流のなかで練り上げられた概念である。そして、前章で明らかにした「ドキュメント」の持続性は、日々の生活のなかでゆくりなくブルトンへ立ち戻ってくる、「ドキュメント」の生命として意味を変えていく。この意味で、ブルトンの「ドキュメント」は、意識的に参照される「資料」ではなく、ブルトンに付きまとい、不意に襲いかかる主体性を持っていたと言える。同時に、これが変容する思考の記録装置であったという点は、ブルトンの「生きた」ドキュメントの特異性を論じるうえで、最重要視すべき観点であることを強調しておきたい。この更新性は、『ナジャ』初版時には確立されておらず、1930年代を通して「解釈」という問題が前景化してくるなかで、円熟したと考えられる。

第4章では、以上の議論を踏まえて、どのような経緯を経て、ブルトンが『ナジャ』を「ドキュメント」という言葉とともに改訂するに至ったのかという点を問題にした。私たちは、最晩年の小詩集『ラの音』において、自動記述が再提起されている点に注目し、本書のなかでブルトンが目配せを行なっている『宣言』との比較を通して、ブルトンの自動記述に対する思惟の変化を跡付けた。同時に「シュルレアリスム遊戯」の一つ

である〈互いのなかに〉を通して、「声」の持つちからに対する再評価と自動記述の射程の見直しが行われた可能性を指摘した。私たちの考えによれば、『ナジャ』を自動記述の文脈に置き、「ドキュメント」として更新する作業は、『ラの音』において、「オートマティックなメッセージ」と「三部会」を自動記述の系譜に位置付ける行為に連なるものである。つまり、それまで自動記述との関係が明瞭でなかった著作を、その射程に含みこむなかで、『ナジャ』が自動記述という位相のもとに「ドキュメント」として再規定されたと考えられるのである。

以上の議論から、本論文は生きた「ドキュメント」の特異性として四つの観点を提出したい。すなわち、内面を映じる「主観性」、瞬間ではなく時間の流れを写しとる「持続性」、書かれた後も書き手に作用し続ける「主体性」、絶えざる書き換えを許す「更新性」である。『ナジャ』という作品は、紙の上に定着されているという意味では、まさしくドキュメントである。しかし、同時にここで重要なことは、これがブルトンに根ざした「ドキュメント」であり、現在に属し、変容し続ける「思考」そのものであったという点である。大幅な改訂を経てもなお歪められることのない「ありのままの」ドキュメントとは、まさにこの点において理解されなければならない。